

## 9. ガリウムシンチグラムにおける腎集積例の検討

陣之内正史 星 博昭 西川 清  
 本田 浩 涌田 裕司 杜若 陽祐  
 中山 幸子 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

当院においてガリウムシンチグラフィを行った781例を対象に腎集積例の臨床的意義について検討した。集積程度を椎体と比較し低いものを+, 同程度のものを++, 高いものを+++と判定した。結果は+10.9%, ++2.1%, +++1.0%で集積のみられたものは合計14%であった。腎集積例において腎病変のみられたものは, +では, 0%, ++では25%, +++では75%を占めており, 集積程度の高いものほど炎症, 腫瘍, 水腎症, 腎不全等の腎疾患を有することが多かった。また肝硬変で腎集積を示したものは41例中19例と多く, 腎疾患を有さない場合の基礎疾患としても肝硬変が最も多かった。

10. 肺癌に対する<sup>67</sup>Ga-ECTの臨床的評価

一矢 有一 鷺海 良彦 桑原 康雄  
 綾部 善治 和田 誠 松浦 啓一

(九大・放)

肺癌に対する<sup>67</sup>Ga-ECTの臨床的意義を検討した。対象は治療前の原発性肺癌36例で, そのうちの13例は手術による確診例である。方法は<sup>67</sup>Ga-Citrateは3-5mCi使用しSearle LFOVを用いてConventional<sup>67</sup>Ga imageを, 島津製LFOV-Eを用いてECT検査を行い, 両者の原発巣および所属リンパ節病巣の検出能について検討した。その結果, 原発巣および所属リンパ節病巣ともに, conventional imageのみの場合と, ECTを加えた場合とでその検出能は全く変らなかった。以上の結果より, <sup>67</sup>Ga-ECTを加えても, 病変の検出能は向上せず, 現段階のECT装置では検査を行う意義は少ないと考えられた。

11. 腹部膿瘍における<sup>67</sup>GaシンチおよびCTの比較検討

桑原 康雄 安森弘太郎 鷺海 良彦  
 西谷 弘 一矢 有一 和田 誠  
 綾部 善治 松浦 啓一 (九大・放)

腹部膿瘍に対するガリウムシンチおよびCTの検出能,

ならびに治療方針決定に果たす役割について比較検討した。

対象は, 腹部膿瘍を疑いこれらの検査を併用した37例である。

膿瘍の最終診断は, 開腹により治療が行われたもののみを膿瘍とし, 保存的治療のみで治癒したものは膿瘍なしとした。外科的治療を必要とした膿瘍に対するsensitivityは, ガリウムシンチ88%(7/8), CT100%(8/8)といずれも高かった。一方specificityはガリウムシンチ45%, CT62%とCTの方がよい傾向がみられたが, 統計的に有意差はなかった。

治療方針に関しては, ガリウムシンチ, CTのいずれかの検査が陰性の場合には, 保存的治療のみでほぼ治癒可能であった。しかし, 両者が陽性でも保存的治療で軽快するものがかなりみられた。

## 座長のまとめ(6~11)

星 博昭

(宮崎医大)

演題6: 肝シンチにて骨・脾のみが描出され, 肝へのRI取込みが認められなかったアルコール性肝障害の症例が報告された。

演題7: ラットDAB肝癌の<sup>67</sup>Ga-ctrate取り込みについて, オートラジオグラフィ, 病理組織学的検討が行われ, 腫瘍辺縁部の細胞分裂が活発な所に強い集積がみられた。

演題8: 唾液腺における各種の良・悪性腫瘍におけるガリウムシンチグラフィの有用性について検討された。

演題9: ガリウムシンチグラムにおける腎集積例について, 集積程度を3段階に分け, その臨床的意義についての報告があった。

演題10: 肺癌における原発巣および胸廓内リンパ節転移の検出能について, conventional<sup>67</sup>Ga-imageと<sup>67</sup>Ga-ECT imageとの比較がなされた。

演題11: 腹部膿瘍の症例における<sup>67</sup>GaシンチおよびCT検査の検出能や治療方針決定に果たす役割について比較検討がなされた。